



Title	音声学基盤音韻論から見た方言習得：非関西圏出身大学生による大阪式アクセント習得における2つの壁
Author(s)	松浦, 幸祐; 田村, 幸誠
Citation	日本語・日本文化. 2023, 50, p. 161-192
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91269
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

音声学基盤音韻論から見た方言習得 —非関西圏出身大学生による大阪式アクセント習得における2つの壁—

松浦 幸祐・田村 幸誠

1. はじめに

本稿は、非関西圏出身者による京阪式アクセントの習得について、音声学基盤音韻論（特に Ohala 1993 のモデル）の観点から議論を行うものである。田村・松浦（2022）の冒頭でも述べられているように、関西地域以外の出身者（例えば本稿筆者の松浦）であっても、進学などに伴い関西地域で数年を過ごせば、「自分は関西弁アクセントに影響を受けている」「関西弁アクセントができるようになってきた」という感覚を持つようになることは少なくない。しかし、そのような感覚を関西圏出身者（例えば本稿筆者の田村）に伝えると、「君の関西弁アクセントには違和感がある」などと言われ、ショックを受けることもまた少なくない。本稿の目的は、(i) このような「方言習得における認識のギャップ」と呼べる現象をめぐって、そのようなギャップを作り出す言語学的要因について考察を行い、その上で、(ii) 非関西圏出身者の京阪式アクセント習得には、大きく2つの障壁があることを議論することにある。

先に、本稿での用語について整理しておく。本稿は、前稿である田村・松浦（2022）と同様に、大阪大学に入学した非関西圏出身者（以下、単に「阪大生」と呼ぶ）を調査対象者としたので、京阪式アクセントの中でも特に大阪におけるアクセントを扱う。そのため、以下では前稿に倣い「大阪式アクセント」という用語を用い、適宜「大阪式」と略す。同様に、東京式アクセントのことは適宜「東京式」と略して議論を進める。

本稿の構成は以下の通りである。まず、第2節では、大阪式アクセントと東京式アクセントの基本的な相違点の中から3点を取り上げて示す。加えて、方言習

得に関連する先行研究として、鹿児島弁話者の若年層に見られるアクセントの変化について論じた Kubozono (2018) について説明する。第3節では、阪大生の大坂式アクセントの習得状況を分析し、冒頭で述べた認識のギャップが生じる理由について考察する。具体的には、Kubozono の指摘と同様、阪大生の大坂式習得においても、アクセント核の有無から習得が始まること、しかし、それを超えて、語の全体的な音調型の習得に関しては（特に特定のタイプの音調型に関しては）、習得がそれ程進んでいないことを指摘し、この「習得の途上性」こそが阪大生と関西圏出身者の間に見られる認識のギャップを作り出す要因であることを指摘する。第4節では、本稿の理論的枠組みとして、「音声学基盤音韻論（phonetically-based phonology）」の考え方を示す。その枠組みを用いて、第5節では、阪大生の大坂式習得における2つの壁、すなわち、(i) 東京式では認められない音調型は習得が困難であることと、(ii) 大阪式が有する2種類の平板式の区別が困難であることについて考察し、いずれの壁も、東京式と大阪式における音韻スキーマの違いに起因することを述べる。第6節はまとめである。

2. 研究の背景

2.1. 大阪式と東京式に見られる相違点

従来から指摘される大阪式と東京式の相違点のうち、ここでは、(i) 平板式の種類数の違い、(ii) 音調型の語頭における制約の違い、(iii) アクセントを担う単位の違いという3点を取り上げこの順で説明する（より詳しくは Shibatani 1990, 上野 1977, 2018, Kubozono 2012, 中井 2002などを参照されたい）。

まず、1点目は、平板式の種類が大阪式では2種類あるのに対して、東京式では1種類しかない点である。大阪式では、平板式について、例えば「桜 HHH」のように H が連続するものと、「ウサギ LLH」のように L が連続するものの2種類が存在する (Shibatani 1990: 181-182)。これに対して、東京式には、平板式が1種類しかなく、例えば「桜」と「ウサギ」はいずれも LHH で発音される。以下、本稿では、大阪式で「桜 HHH」のように H が連続するタイプの平板式を「H 平板」と呼び、「ウサギ LLH」のように L が連続するタイプの平板式を「L 平板」と呼ぶこととする。この場合、東京式における「桜／ウサギ LHH」のよ

うな平板式は、H 平板の語頭 1 拍が低くなつたものであると位置付けることができる (Shibatani: 178-179)。

2 点目は、大阪式では、語頭に HH や LL の連続が出現できるが、東京式では原則的にそれができない点である。大阪式では、上の段落で挙げた平板式の「桜 HHH」や「ウサギ LLH」に加えて、起伏式においても、「頭 HHL」「カマキリ LLHL」のように、語頭の 2 拍において HH や LL の連続が許容されるという特徴がある (Shibatani 1990: 159)。これに対して、東京式では、そのような連続は原則的に許されず、語頭は LH または HL のみが現れる (例: 頭 LHH; カマキリ HLL)。ただし、早田 (1999) や儀利古 (2016) などで言及されているように、東京式においても、自然な発話では、語頭 2 拍が重音節を形成する場合であれば、語頭が HH で発音されることもある¹⁾。例えば、東京式において、「広告 (ヨーコク) LHHH」や「京染め (キヨーザメ) LHHH」は、実際の発話ではしばしば HHHH としても実現する。

3 点目は、「アクセントを担う単位 (accent-bearing unit; McCawley 1968, Kubozono 2012, 用語の日本語訳は窪菌 1998 による)」として機能するものが、大阪式では拍であるのに対して、東京式では音節である²⁾ 点である。その違いが顕著に現れる例として、特殊拍 (撥音、促音、長音、二重母音の後半など、独立した音節を形成しない拍, 窪菌 1998:7) がアクセントを担えるかどうかの違いが挙げられる。東京式では、特殊拍はアクセントを担うことができず、例えば外来語のように、「語末から数えて 3 拍目にアクセント核をおく」といったアクセント規則³⁾ がある語類でも、その拍が特殊拍である場合、(1) のように、アクセント核は 1 つ前の自立拍 (単独で音節を形成できる拍, 窪菌 1998:7) に移動し、音節の中核母音にアクセント核を担わせようとする傾向⁴⁾ がある (Kubozono 2012: 1404, (1) は窪菌 1998:11 の一部に本稿筆者が H や L を付したものである)。

(1) ワシントン LHLLL, サイパン HLLL, コペンハーゲン LHHLLL

これに対して、伝統的な大阪式⁵⁾ では、「インド LHL」「兄弟 (キヨーダイ) LHLL」のように、特殊拍であってもアクセント核を担える⁶⁾ ため、音節では

なく拍がアクセントを担う単位として機能しているとされる（Kubozono 2012: 1404）。

2.2. 鹿児島弁話者若年層に見られるアクセント変化（Kubozono 2018）

続いて、本稿の目的に関連する先行研究として、Kubozono (2018) の研究を見る。Kubozono は、鹿児島弁アクセント（以下、「鹿児島式」と呼ぶ）話者が東京式の影響を受ける場合を例に、方言が他の方言から影響を受ける際には、影響を与える側の語（この場合、東京式の語）がアクセント核を持つか否かが主要なパラメータとなることを論じている。以下、鹿児島式の持つ特徴を簡単に説明した上で、Kubozono の例を用いて、そのプロセスについて説明する。

まず、Kubozono (2012: 1398) や Shibatani (1990: 182–183) で記述されているように、鹿児島式には、平板アクセントと起伏アクセントの音調型がそれぞれ 1 つずつしかないという特徴がある。すなわち、鹿児島式の平板アクセント（Kubozono 2018 では Type B）は、「ウサギ LLH」や「キツネ LLH」のように、あるいは「ウサギが LLLH」や「キツネが LLLH」のように、L 平板の 1 種類しか存在しない。また、起伏アクセント（Kubozono 2018 では Type A）については、「飴 HL」や「魚 LHL」や「ケダモノ LLHL」のように、後ろから 2 つ目の音節にアクセントが置かれる型のみを有する。

Kubozono (2018) によれば、そのようなアクセント体系を持つ鹿児島式話者が東京式アクセントを聞く際、表 1 の傾向が観察されるという。表 1 では、鹿児島式 (KJ) において Type A ([+FALL]; 本稿の「起伏式」) の語が平板式 [-FALL] に変化するのは、対応する東京式 (TJ) の語が起伏式 (Accented) であるとき (7%) よりも、平板式 (Unaccented) であるとき (43%) の方が高いこと、また、反対に、鹿児島式で Type B ([‐FALL]; 本稿の「L 平板」) の語が起伏式 [+FALL] に変化するのは、それに対応する東京式の語が起伏式 (Accented) であるとき (25%) の方が高いことが示されている。

表1：鹿児島式話者若年層におけるアクセント変化 (Kubozono 2018: 288)

KJ	TJ	‘Accented’	‘Unaccented’
		[+ FALL]	[-FALL]
Type A [+FALL] → [-FALL]		7%	43%
Type B [-FALL] → [+FALL]		25%	11%

例として、「青信号」という語の変化を用いて説明しよう。この語は、鹿児島式ではL平板 (Type B) のLLLHで発音される⁷⁾。Kubozonoによれば、鹿児島式話者の若年層では、東京式の「青信号 LHHLLL」に影響を受け、この語のアクセントは「LLHL」へと変化する傾向にあるという。このとき、変化後の鹿児島式における「青信号 LLHL」であっても、鹿児島式のアクセント体系で許される形式 (Type A) となっており、例えばLHLLやLHHLなどにはならないに着目されたい。この点については4.2節で改めて論じる。

3. 阪大生による大阪式習得の途上性

本節では、田村・松浦 (2022) に新たなデータを加え、阪大生による大阪式の習得状況を分析し、大阪式母語話者との間で認識のギャップが生じる原因について考察する。3.1節で調査の概要を述べたあと、3.2節では、まず、全体的な傾向として、阪大生の大阪式習得は、アクセント核の有無については進んでいるが、大阪式の具体的な音調型までは習得できていないという途上性を持つことを指摘し、その途上性こそが大阪式母語話者との認識のギャップを作り出していることを議論する (3.2.1節)。続いて、阪大生の回答の傾向について、(i) 東京式でも認められる音調型については習得が進んでいるが、(ii) 東京式では認められない音調型は習得が進んでおらず、かつ、(iii) H平板とL平板が区別できていないという3点を指摘する (3.2.2節)。

3.1. 調査の概要

本調査は全てZoomを介したオンライン方式で行い、調査語を1語ずつスライドに表示して、東京式話者の松浦が東京式の発音で「関西弁で読んでください」

と調査対象者に語りかけながら進めた。各語は2回ずつ読み上げてもらったが、分析には1回目の発音のみを用いている。分析には、日常語、地名などの固有名詞、若者言葉などから成る26語⁸⁾を用いた。また、東京式と大阪式で単純に高低を逆転させるような回答を避けるため、調査語には全て3～4モーラの語を選んだ⁹⁾（調査語のリストを付録として稿末に付した）。また、調査対象者となる阪大生は、いずれも東京式アクセント地域の出身で、大学入学を機に初めて日常的に大阪式アクセントを聞くようになった者であり、かつ、大阪式アクセントを聞き取ることができ、大阪式で話そうと思えばある程度は話せると自負する者である。調査対象者数は、首都圏出身者7名（うち東京都出身者3名、神奈川県出身者2名、埼玉県出身者1名、群馬県出身者1名）、静岡県出身者8名の合計15名である（東京式アクセント地域の基準はShibatani 1990: 211に従った）。調査対象者の大阪在住歴は、1～1.5年が2人、2～2.5年が3人、3年が7人、5年が3人であった。

3.2. 結果の分析

3.2.1. 阪大生の習得途上性と認識のギャップ

まずは、阪大生の回答に見られる傾向として、音調正解率は低いが核有無正解率は高いという特徴を見る。ここで、この2つの尺度について田村・松浦（2022）を基に説明しておく。「音調正解率」とは、阪大生の回答が大阪式の音調と完全に一致した割合を計算したものである。例えば、「カマキリ」という調査語は、大阪式ではLLHLと発音される¹⁰⁾。したがって、阪大生がこの語をLLHLと発音できた場合にのみ、「音調を正解した」とカウントする。これに対して、「核有無正解率」とは、調査語のアクセント型が起伏式であるか平板式であるか（つまり、アクセント核の有無）を正解した割合を計算したものである。「カマキリLLHL」で言えば、阪大生の回答が起伏式でありさえすれば、LLHLだけでなく、HLLLやLHHLなどであっても、「核有無を正解した」とカウントする¹¹⁾。

阪大生による音調正解率が非常に低いことから見ていこう。表2では、調査対象者ごとの音調正解率とその平均が示されている。首都圏出身者と静岡出身者でやや差はある¹²⁾が、どの調査対象者も4割程度の正解率となっており、最も高

い調査対象者であっても6割以下であることがわかる。田村・松浦（2022）の調査結果と同様、阪大生は大阪式の音調型の6割近くを正しく習得できていないと言えよう（調査語ごとの具体的な誤答傾向については次節で見る）。

表2：阪大生による音調正解率

音調正解率 (%)		1	2	3	4	5	6	7	8	平均
東京式	首都圏	34.62	38.46	42.31	38.46	42.31	34.62	46.15	-	39.56
	静岡	50.00	53.85	38.46	50.00	42.31	30.77	42.31	50.00	44.71

これに対して、核有無正解率は、表3が示すように、ほぼ全員が8割以上と高い正解率を示す。つまり、表2と表3のごく単純な比較からは、阪大生は大阪式の語が起伏式か平板式か（すなわち、アクセント核があるかどうか）については習得できているが、具体的な音調型（例えば、アクセント核があるとした場合にそれが何拍目かなど）については習得が進んでいないことが窺える。

表3：阪大生による核有無正解率

核有無正解率 (%)		1	2	3	4	5	6	7	8	平均
東京式	首都圏	80.77	88.46	84.62	65.38	92.31	80.77	84.62	-	82.42
	静岡	96.15	92.31	88.46	96.15	88.46	80.77	76.92	92.31	88.94

ここで、核有無正解率がこれほど高くなる理由について、表4から表6を用いて少し詳しく観察しておく。これら3つの表には、調査語ごとに15人中何人の阪大生がアクセント核の有無を正解できたかを「核有無正解数」として示している。ただし、調査語のうち、東京式で尾高型の発音を持つもの（「雷 LHHH/LHHL」と「男 LHH」）は表から除外した¹³⁾。まず、表4と表5に示したものは、東京式と大阪式とでアクセント核の有無（すなわち、起伏式か平板式か）が一致する語である。いずれの語も核有無正解数は高く、表4では「鈴虫」を除く全ての語に関して15人全員が正解しており、表5でも（「梅田」「タバコ」は6割ほどで相対的に見ればやや低いが）14人または15人が正解している。

表4：東京式でも大阪式でも起伏式で発音される調査語

	核有無正解数	大阪式	東京式
魂	15/15	HLLL	HLLL
阪神	15/15	HLLL	HLLL
難波	15/15	HLL	HLL
鈴虫	14/15	LHLL	LHLL
螢	15/15	LHL/HLL	HLL
カマキリ	15/15	LLHL	HLLL

表5：東京式でも大阪式でも平板式で発音される調査語

	核有無正解数	大阪式	東京式
坂下	14/15	LLLH	LHHH
阪大	15/15	LLLH	LHHH
バ先	15/15	LLH	LHH
豊中	15/15	HHHH	LHHH
ニワトリ	14/15	HHHH	LHHH
梅田	11/15	HHH	LHH
タバコ	10/15	HHH	LHH

ここで重要な点は、表4や表5のような、東京式と大阪式でアクセント核の有無が一致するもの、すなわち、仮に阪大生が東京式の音調型そのままで回答したとしても正解としてカウントされる調査語だけではなく、東京式と大阪式でアクセント核の有無が一致しない調査語に関しても核有無正解数が高い点である。表6に示されている語は、東京式では平板式で発音されるのに対して大阪式では起伏式で発音される語である。これらの語についても、「足切り」を除く全ての語で6割以上の阪大生がアクセント核の有無を正解している。したがって、少なくとも表6の語に関して、阪大生は大阪に来てから新たに起伏式の発音を認識し、これらの語にアクセント核があることを習得していると考えられる。なお、今回の調査では、表6の逆、つまり、東京式では起伏式だが大阪式では平板式で発音される語（例：カラス 東京式では HLL／大阪式では LLH）は調査語に含まれてい

ない。また、「みのぱん」は大阪式の正解に起伏式 (LHLL) と平板式 (LLLH) の両方が設定されていたため、ここでは除いた¹⁴⁾。

表6：東京式では平板式だが大阪式では起伏式で発音される調査語

	核有無正解数	大阪式	東京式
パンキョー	15/15	LHLL	LHHH
卒論	14/15	LHLL	LHHH
関電	13/15	LHLL	LHHH
地下鉄	11/15	LHLL	LHHH
言社	12/15	LHL	LHH
再履	12/15	LHL	LHH
とりき	15/15	LHL	LHH
イチゴ	9/15	LHL	LHH
足切り	2/15	LLHL	LHHH
座学	14/15	HLL	LHH

以上の議論からは、本稿冒頭で述べた大阪式習得における認識のギャップが生じる原因を説明することができる。つまり、阪大生からしてみれば、表6に挙げたような、東京式地域で生活していた時は平板式で発音していたり、あるいは、実際に発音したことがなくとも、東京式の知識から推測すれば平板式であると推測されたりする語の発音を、大阪式での起伏式の発音に変えているわけである。本稿冒頭で述べた「大阪式に影響されている」「大阪式ができるようになっている」という意識が阪大生に生じるのはこのためだと思われる。しかし、関西圏出身者は、当然、具体的な音調型を基準に大阪式の正誤を判断するため、たとえ阪大生の発音が平板式から起伏式になっていたとしても、音調型が間違っているれば、冒頭の「違和感がある」という評価を阪大生に与えることとなるわけである。

では、阪大生はなぜ音調型の習得を進めることができないのだろうか。この問い合わせるために、次節では、阪大生の回答の傾向を具体的に分析し、阪大生が

大阪式の音調型を習得する際の3つの傾向を指摘する。

3.2.2. 阪大生の回答に見られる傾向

阪大生の回答には、大きく分けて(2)の3つの傾向が見出される。以下、それぞれこの順で説明する。なお、田村・松浦（2022）において大阪式の発音に2通りの音調型が設定されていた「みのばん LHLL/LLLH」「蛍 LHL/HLL」「男 HHL/HLL」「雷 HHHL/HHLL」は本節では分析対象から除いた¹⁵⁾。

- (2) a. 東京式でも可能な音調型であれば習得が進んでいる
 b. 東京式では不可能な音調型であると習得が進んでいない
 c. L 平板と H 平板の区別がつかず、間違える場合も H 平板で間違える

まず、(2a)について、表7を見られたい。表7には、大阪式での音調型が東京式の音調レパートリーに含まれる調査語が挙げられている。つまり、ここで挙げられている語の音調型（HLLL、HLL、LHLL、LHL）は、いずれも東京式の音調型としても認められるものであり、阪大生も（表7に挙げられている語自体をその音調で発音したことはなくとも）東京式を発音する際には発音したことがあるものである。表7では、そのような音調型を持つ調査語ごとに、阪大生の音調正解数、大阪式での音調型、阪大生の具体的な誤答とその人数が示されている。「イチゴ」を除くいずれの語についても15人中7割以上の阪大生が正しい音調を答えられていることがわかる。

表7：東京式でも可能な音調型の語の音調正解数と誤答

	音調正解数	大阪式	阪大生の誤答（カッコ内は人数）
魂	14/15	HLLL	LHLL (1)
阪神	14/15	HLLL	HHLL (1)
座学	14/15	HLL	LHH (1)
難波	13/15	HLL	HHL (1), LHL (1)

鈴虫	13/15	LHLL	LHHH (1), LHHL (1)
卒論	14/15	LHLL	LHHH (1)
地下鉄	11/15	LHLL	LHHH (4)
とりき	13/15	LHL	HHL (1), HLL (1)
イチゴ	6/15	LHL	LHH (6), HLL (3)

続いて、(2b) 東京式では認められない音調型の回答傾向について述べる。議論の都合上、大阪式において起伏式の語と平板式の語に分けて説明する。まず、起伏式の語の結果を表8に示す。表8には、東京式アクセントでは認められない音調型を持つ大阪式の語と、阪大生によるそれらの音調正解数と誤答が挙げられている。

まずは、「言社（ゲンシャ LHL）」のように、特殊拍（表8では撥音または二重母音の後半のイ）にアクセント核がある4例について見ておく。表7での正解数と比較してもわかるように、ほとんどの阪大生がこれらの語の音調を正解できておらず、もっとも正解数の高い「再履（サイリ LHL）」であっても正解者は5人であった。また、これらの語は、正解数が低いだけでなく、誤答にも傾向が見られる。表8の右端の列に示されているように、これらの語の誤答の多くは、特殊拍の1つ前の自立拍（表8の語では全て第1拍）にアクセント核を置く音調型（HLLまたはHLLL）や、語頭の2拍にHHが連続するような音調型（HHLまたはHHLL）となっている。「言社」では10人、「再履」では7人、「パンキョー」では15人全員、「関電」では12人がそのような誤答をしていることがわかる。なお、表7で見たように、同じ LHLL や LHL の語であっても、「卒論 LHLL」や「とりき LHL」は正しい音調型を答えられていたことを想起されたい。つまり、阪大生は、LHLL や LHL という音調型自体が正解できないわけではなく、そのアクセント核が特殊拍に担われる形式が正解できないのである。

表8：東京式では認められない音調型の音調正解数と誤答（起伏式）

		音調正解数	大阪式	阪大生の誤答（カッコ内は人数）
特殊拍に核	言社	2/15	LHL	HLL (7), HHL (3), HHH (2), LHH (1)
	再履	5/15	LHL	HLL (6), LHH (3), HHL (1)
	パンキョー	0/15	LHLL	HLLL (14), HHLL (1)
	閑電	0/15	LHLL	HLLL (8), HHLL (4), LHHH (2), HHLH (1)
語頭にLL	足切り	2/15	LLHL	LHHH (11), LLLH (2)
	カマキリ	2/15	LLHL	HLLL (11), LHLL (1), LHHL (1)

また、表8の下半分には、東京式で認められない音調型として、語頭に LL の連続を持つ調査語が挙げられている。語数が 2 語と少ないため、傾向とまでは言えないが、音調正解数は低く、少なくとも (2b) の傾向に矛盾するものではない。また、阪大生による誤答を見てみると、いずれも東京式での発音（足切り LHHH; カマキリ HLLL）がそのまま誤答として現れる特徴が観察される。

次の表9は、傾向 (2b) と (2c) の両方に関わる。まず、(2b) に関わる点として、表9では、東京式で認められない H 平板の語と L 平板の語が挙げられているが、いずれも音調正解数が非常に低いことがわかる。それに加えて、(2c) の特徴として、表9では、阪大生が大阪式の H 平板と L 平板を答える際には、大阪式での正しい発音がどちらであろうと、その大半を東京式の平板式（LHHH または LHH）で回答していることが分かる。まず、H 平板の語に関して、「豊中」では誤答した 11 人全員が、「ニワトリ」では 14 人が、「梅田」では 10 人が、「タバコ」では 7 人が LHHH または LHH で回答している。さらに、L 平板の語についても、「坂下」では 14 人が、「阪大」と「バ先」では誤答した 13 人全員が、それぞれ東京式の平板式（うち第2拍が撥音である「阪大 ハンダイ」では 12 人が HHHH）で回答している。誤答を見ても、「タバコ」を LLH と回答した 1 例以外は、間違えて L 平板で回答することすらないと言えよう。なお、表9以外の語も含めた全調査語の誤答において、L 平板が現れるのは、他に「足切り LLHL」を LLLH と回答した 2 例のみである（表8参照）。

表9：東京式で認められない音調型の音調正解数と誤答（平板式）

		音調正解数	大阪式	阪大生の誤答（カッコ内は人数）
H 平 板	豊中	4/15	HHHH	LHHH (11)
	ニワトリ	0/15	HHHH	LHHH (14), LHHL (1)
	梅田	1/15	HHH	LHH (10), LHL (2), HLL (2)
	タバコ	2/15	HHH	LHH (7), LHL (4), HHL (1), LLH (1)
L 平 板	坂下	0/15	LLLH	LHHH (14), LHLL (1)
	阪大	2/15	LLLH	HHHH (12), LHHH (1)
	バ先	2/15	LLH	LHH (13)

4. 理論的枠組み

本節では、本稿が理論的枠組みとして採用する「音声学基盤音韻論 (phonetically-based phonology)」について、特に Ohala (1993) のモデルを基に説明する。はじめに、4.1 節で、Ohala (1993) における音韻変化のメカニズムとして、修正不全 (hypo-correction) と過剰修正 (hyper-correction) という 2 つの考え方を概観する。その上で、4.2 節において、音声学基盤音韻論の観点から方言習得のプロセスを捉え直すことを試みる¹⁶⁾。

4.1. 音声学基盤音韻論

Ohala のモデルの中心的な主張として、音韻変化は修正不全と過剰修正という 2 つのプロセスによって生じるというものがある。まずは、この 2 つのプロセスについて説明する前に、その前提概念となる修正 (correction) のプロセスについて、図 1 の鼻音化 (nasalization) を例に見ておこう。

修正とは、聞き手が話し手の発音を聞き取る際、話し手の実際の発音から雑音を捨象するなどして、話し手の意図通りの発音を聞き取るプロセスであるとされる。例えば、図 1 の左半分から中央では、話し手が pen という語を発音しようとして、すなわち、/pen/ という発音の意図を持って発音しようとすると、尾子音の n という環境によって母音の ε が鼻音化し、実際には [pẽn] という発音になってしまふことが示されている。しかし、Ohala によれば、聞き手は、そのような発音を聞く際、図 1 の右半分で示されているように、ε が鼻音化しているとい

う情報を捨象し、話し手が意図した通りに /pɛn/ を聞き取っているとされる。このように、話し手の意図通りの発音（ここでは /pɛn/）を聞き取るプロセスの中で、実際に発せられた音声（ここでは [pɛn]）の中から、環境によって生じた雜音（ここでは尾子音 n によって生じた ε の鼻音化）を聞き手が捨象する行為のことを修正と呼ぶ。



図 1 : pɛn の鼻音化における修正

つまり、聞き手において修正が適切に働いてさえいれば、音声環境や話し手の発音の癖などによって実際の発音に多少の雜音が混入したとしても、聞き違えや音の変化は生じない (Ohala 1993: 245)。例えば図 2 のように、ε の鼻音化が強まることで尾子音の n が判別しづらくなり、[pɛ(n)] とでも表記するような発音になったとしても、聞き手が /pɛn/ に修正できていれば、音の変化は生じない（括弧書きの n はその音が判別しづらいことを表す）。

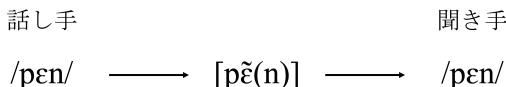


図 2 : pɛn の鼻音化における修正（n が判別しづらい場合）

Ohala のモデルにおける修正不全と過剰修正とは、修正のプロセスが何らかの形で適切に機能しない場合を指すのだが、まずは、修正不全、すなわち、生じるべき修正が生じない場合について図 3 で説明する。図 3 の左側から中央では、図 2 と同様に、話し手が /pɛn/ という発音を意図して発音したにも関わらず、実際の発音では ε が鼻音化して n が聞き取りづらくなっていることが示されている。ここで、図 3 では、図 2 と異なり、聞き手において修正が行われず、雜音の混入

した [pɛ(n)] がそのまま聞かれてしまうことで、あたかも話し手の意図した発音が /pɛ/ であったかのように認識されてしまうことが示されている。このように、聞き手が修正をし損ない、話し手の実際の発音をそのまま認識するプロセスのことを、修正不全と呼ぶ。修正不全が生じると、図 3 のように、結果として話し手と聞き手の間で音の変化が生じることとなる（実際には、そのような聞き違えが直ちに体系的な音韻変化を生じさせるわけではなく、ここではある程度単純化して考えている。音声学的な特徴が音韻として取り入れられていく音韻化のプロセス (phonologization, Hyman 2013) の詳細については、田村 2023 : 3 節を参照されたい）。

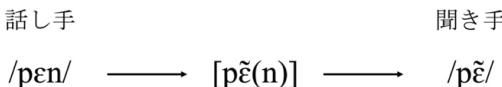


図 3 : /pɛn/ の鼻音化における修正不全

続いて、過剰修正、すなわち、修正が不必要に生じる場合について図 4 を用いて説明する。図 4 で想定している状況は、鼻母音と口腔母音が弁別的に働く（つまり、/pɛn/ と /pɛn/ が異なる意味を持つ）言語の話し手が /pɛn/ という発音を意図して発音し、実際の発音においても意図通りに [pɛn] という発音がなされた場合である。しかし、この場合、例えば聞き手は [ɛ] という母音の鼻音化が、尾子音の n という環境によって生じた雑音であるのか、それとも話し手が意図したものであるのか、混同してしまう可能性が生じる。図 4 では、聞き手が [ɛ] の鼻音化を雑音であると判断し、不必要的修正を行ってしまうことで、話し手の意図とは異なる発音を聞いてしまうプロセスが示されている。このように、聞き手が不必要的場面で修正を適用してしまうプロセスのことを、過剰修正と呼ぶ。過剰修正が生じた場合も、聞き手は話し手の意図と異なる音声を聞き取っており、結果として音の変化が生じるきっかけとなり得る。

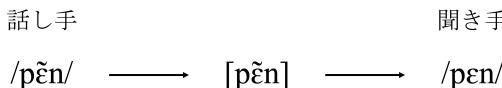


図4：pɛnにおける過剰修正

4.2. 音声学基盤音韻論から見た方言アクセントの習得

本節では、音声学基盤音韻論の観点から見た方言アクセントの習得における難点について説明する。結論を先に述べておくと、方言習得における難点の一つとは、聞き手が自らの母方言で慣習化されている音韻的なスキーマを（無意識に）習得対象の方言の音声に適用してしまうことで、その発音に含まれる（時に重要な差異となる）特徴が捨象されてしまい、話し手の意図した発音とは異なるものを聞き手が聞いてしまう点にあると考えられる。

まず、前節で見た Ohala (1993) のモデルを踏まえた上で、2.2 節で示した鹿児島式における「青信号」のアクセント変化の例に戻ると、このプロセスは聞き手による過剰修正の一種であると分析することができる。つまり、図5で表されているように、話し手（この場合は東京式話者）が「青信号」を /LHHLLL/ と発音することを意図して、そのように発音した（つまり、実際の発音も [LHHLLL] であった）と想定した場合、聞き手（この場合は鹿児島式話者）はその発音を /LLHL/ に聞いてしまうのだと考えるわけである。また、この過剰修正を引き起こす原因となるのは、鹿児島式と東京式における「距離を数える単位」の慣習の相違であると言えよう。2.1 節で述べた通り、東京式では、音声学的入力を拍単位で数える（すなわち、「青信号」を 6 拍と数える）のに対して、鹿児島式では、音声学的入力を音節単位で数える（すなわち、「青信号」を ア.オ.シン.ゴウ.のように区切り、4 音節と数える）。さらに、アクセント核を有する音調型についても、東京式では拍数が 6 であればアクセント核の位置に応じて 6 個（平板式を含めれば 7 個）の音調型があるのに対して、鹿児島式では音節数が 4 でアクセント核¹⁷⁾があれば、原則的に /LLHL/ となることが慣習化しているのであった。そして、そのような音声・音韻認知の習慣¹⁸⁾による知識（以下、「音韻スキーマ」と呼ぶ）を持つ鹿児島式話者は、東京式の「青信号」を聞く際にも鹿児島式

の音韻スキーマを参照しながら音声学的入力を聞いてしまい、結果として「青信号」を LLHL と認識してしまうのだと考えられる。



図 5：「青信号」における過剰修正

反対に、方言習得における過剰修正という難点を乗り越えるプロセスとは、母方言の音韻スキーマが破棄 (de-phonologize, Hyman 2013) され、修正不全が生じることで、話し手の発音をそのままに聞けるようになるプロセスであると言える。例えば、鹿児島式話者が東京式の「青信号 LHHLLL」をそのままに認識し、習得できたとき、その話者は、鹿児島式で慣習化されている「音節単位で数える」や「有核の音調型は LL…HL」といった音韻スキーマを破棄し、図 6 のように、東京式話者の発音を修正せずに認識できていると考えられる。



図 6：「青信号 LHHLLL」の習得

5. 考察：大阪式習得における 2 つの壁

本節では、第 4 節で導入した理論的背景を基に、阪大生による大阪式習得を妨げる 2 つの壁について考察する。第 3 節では、阪大生の誤答傾向として、東京式で認められない音調型を間違えやすいことと、H 平板と L 平板の区別ができないことを挙げた（第 3 節の (2b) と (2c)）。以下、5.1 節と 5.2 節において、この 2 つの壁が、いずれも東京式で慣習化している音韻スキーマによって作り出されていることを議論する。

5.1. 第1の壁：東京式では認められない音調型の習得

まずは、第1の壁として、東京式では認められない音調型を間違えやすいことについて考察する。第3節では、そのような音調型のタイプとして、H平板、L平板、特殊拍にアクセント核があるもの、「足切り」「カマキリ」など語頭にLLの連続が生じるものを見た。ただし、語頭にLLの連続が生じる語については、上に挙げた2例しか調査語がなく、傾向を捉えることは難しいため、本節ではH平板、L平板、特殊拍にアクセント核がある起伏式の3種類について考察を行うこととする。

まずはH平板とL平板について述べる。表9で示した通り、阪大生の誤答には、これら2つの平板式を回答する際、語頭の1拍目を低くした東京式の平板式（LHHやLHHH）で答える傾向が見られた（以下に表10として再掲する）。

表10：H平板/L平板の音調正解数と誤答（表9を再掲）

		音調正解数	大阪式	阪大生の誤答（カッコ内は人数）
H 平 板	豊中	4/15	HHHH	LHHH (11)
	ニワトリ	0/15	HHHH	LHHH (14), LHHL (1)
	梅田	1/15	HHH	LHH (10), LHL (2), HLL (2)
	タバコ	2/15	HHH	LHH (7), LHL (4), HHL (1), LLH (1)
L 平 板	坂下	0/15	LLLH	LHHH (14), LHLL (1)
	阪大	2/15	LLLH	HHHH (12), LHHH (1)
	バ先	2/15	LLH	LHH (13)

H平板とL平板が区別できない原因是次節で議論するとして、阪大生の誤答パターンにLHHとLHHHが非常に多く見られる理由は、阪大生が東京式の音韻スキーマを参照しながら大阪式の発音を聞いていることに起因すると考えられる。4.2節では、鹿児島式の話者が東京式の「青信号 LHHLL」を聞いた際に、4拍でアクセント核があるという情報が認識できると、具体的な音調型は鹿児島式の音韻スキーマである/LLHL/ (Type A)を参照してしまうと想定したが、それと同様に、阪大生（東京式話者）は、大阪式のH平板やL平板を聞いた際に、

アクセント核がないという情報を認識すると、具体的な音調は東京式の音韻スキーマ (LH…H) を参照してしまうのだと考えられる。

したがって、表 10 に関わる阪大生の誤答は、図 7 と図 8 のように分析される。つまり、例えば阪大生が大阪式の「豊中 HHHH」や「坂下 LLLH」を聞き、それらが 4 拍でアクセント核のないことを聞き取れた場合、自らが持つ /LHHH/ という音韻スキーマを基に、例えば H 平板が持つ「語頭は H であること」や、L 平板が持つ「2 拍目以降も L であること」といった、具体的な音調に関わる情報は捨象してしまっている、言い換えれば、大阪式の発音を過剰修正してしまっているのだと考えられる。

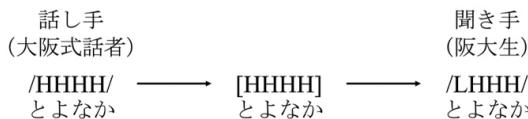


図 7：阪大生の聞き取りにおける「豊中 HHHH」の過剰修正

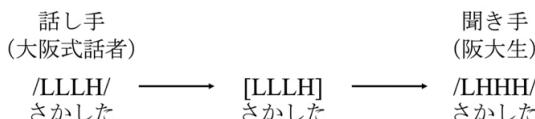


図 8：阪大生の聞き取りにおける「坂下 LLLH」の過剰修正

続いて、特殊拍にアクセント核がある起伏式（以下、便宜的に「インド型」と呼ぶ）の誤答であるが、この場合も、東京式の音韻スキーマが原因になっていると考えられる。表 8 で見た通り、今回の調査で用いたインド型の調査語は、全て大阪式において 2 拍目の特殊拍にアクセント核を持つ語（つまり、LHL か LHLL）であったが、阪大生の誤答には、1 拍目にアクセント核を置いた HLL/HLLL や、語頭 2 拍を高く発音した HHL/HHLL という発音が多く見られた。（以下に表 11 として表 8 を一部再掲する）。

表 11：インド型の語の音調正解数と誤答（表 8 を一部再掲）

		音調正解数	大阪式	阪大生の誤答（カッコ内は人数）
特 殊 拍 に 核	言社	2/15	LHL	HLL (7), HHL (3), HHH (2), LHH (1)
	再履	5/15	LHL	HLL (6), LHH (3), HHL (1)
	パンキョー	0/15	LHLL	HLLL (14), HHLL (1)
	閑電	0/15	LHLL	HLLL (8), HHLL (4), LHHH (2), HHLH (1)

これらの誤答は、東京式が持つ「音節がアクセントを担う単位である」という音韻スキーマが引き起こす図9の過剰修正によるものだと考えられる。つまり、阪大生は、例えば大阪式の「言社 LHL」という発音を聞いた際、それがアクセント核を有することは聞き取れるが、東京式の音韻スキーマを参照しながら聞いてしまうため、アクセントを担う単位が音節であるかのように認識してしまう、言い換えれば、アクセント核が撥音拍にあることを過剰修正してしまうのだと考えられる。このことは、表11の誤答に、頭高型の HLL/HLLL だけでなく、語頭2拍分（自立拍+特殊拍）を1つの音節にまとめて H を付与する HHL/HHLL の発音が見られることからも裏づけられよう。

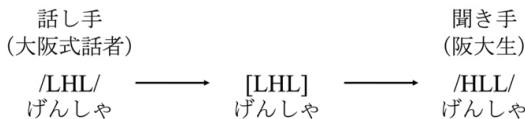


図9：阪大生の聞き取りにおける「言社 LHL」の過剰修正

5.2. 第 2 の壁：H 平板と L 平板の区別

続いて、阪大生の大阪式習得を阻む第2の壁として、大阪式が持つ2つの平板式を区別できない点について、それらの語頭子音におけるピッチの動きに着目して考察する。具体的には、大阪式のH平板とL平板は、語頭の子音区間にV字型のピッチ変化が現れるかどうかという対立を持つのに対して、東京式ではそのような対立が見られず、その音韻スキーマの違いが、阪大生がH平板とL平板を区別する際の壁になっている可能性を議論する。

まず、大阪式が東京式と異なる点として、「式音調の区別」と呼ばれる特徴について概観しておく。これは、東京式がアクセント核の有無と位置のみによって個別の音調型を区別するのに対して、大阪式では、それに加えて、語頭が高く始まるか低く始まるかによっても音調型を区別するという特徴である。一般に、前者のパターンは「高起式」、後者のパターンは「低起式」と呼ばれる（窪薙 2021: 41 など）。また、郡（2012b）などでは、高起式と低起式のピッチ曲線が示す全体的な形状として、高起式では高く始まって少しづつ下降する「漸降性」を示し、低起式では低く始まって（平板式の場合は）最終拍の前まで徐々に上昇していく「上昇性」を示すとされる。つまり、本節の議論は、H 平板と L 平板を区別するための手がかりが、そのような語（や文節）の全体が呈する形状だけでなく、語頭の子音区間にも存在する可能性を指摘するものとして位置付けられる。なお、本節ではあくまで 2 つの平板式の区別に焦点を絞って議論を行うため、以下でも引き続き H 平板／L 平板という用語を用いる。

では、大阪式の H 平板と L 平板の語頭子音区間に現れる特徴について見てみよう。そのようなピッチの動きを観察しやすくするために、語頭に m の子音を持つ平板式の語（「ママカリ（魚の一種）HHHH」と「ママ友 LLLH」）と、語頭に w の子音を持つ平板式の語（渡す「HHH」と「私（ワタシ）LLH」）を大阪式母語話者 4 人（A～D；うち 1 人は田村）に発音してもらった。図 10 と図 11 は、そのうちの 1 人による発音を取り出したものである。注目されたいのは、H 平板の語（図 10）では、語頭の子音部分において、V 字型のピッチの動きが観察される点である。これに対して、L 平板の語（図 11）の発音では、子音部分の形状が異なり、V 字型が見られないことが分かる。

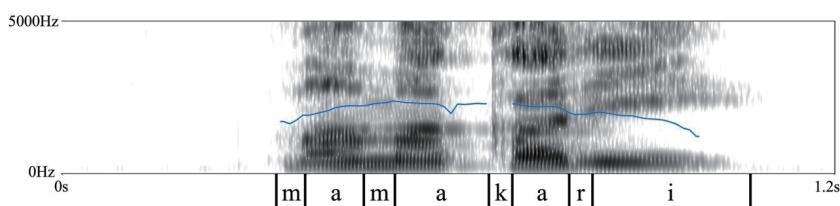


図 10a : A による「ママカリ HHHH」のピッチ曲線（V 字型が見られる）

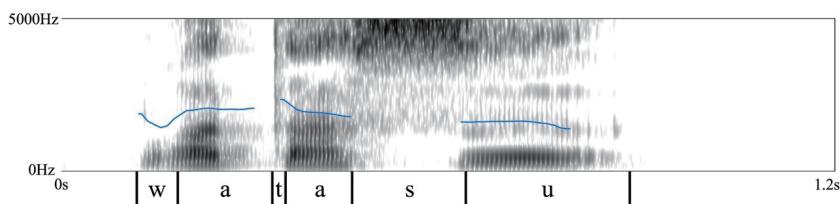


図 10b : A による「渡す HHH」のピッチ曲線（V 字型が見られる）

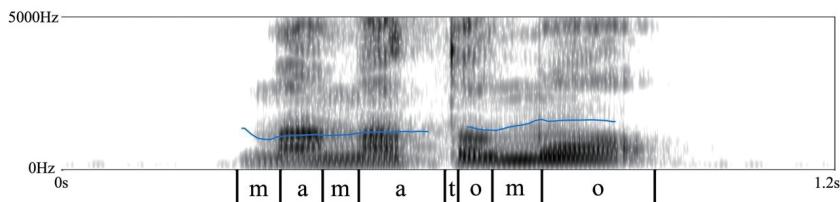


図 11a : A による「ママ友 LLLH」のピッチ曲線（V 字型が見られない）

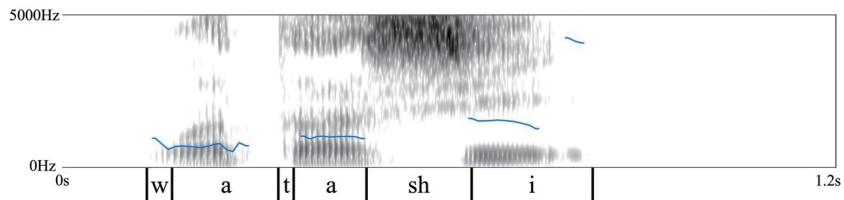


図 11b : A による「私」のピッチ曲線（V 字型が見られない）

さらに、表 13 に示したように、残りの 3 人についても同様の結果が見られた。表 13 では、大阪式母語話者 4 人の各発音について、語頭のピッチに図 10 と同様の V 字型の形状が見られたものは「V」と表し、図 11 のように V 字型が見られないものは×と表している。なお、話者 D の「ママ友」が「(V)」となっているのは、この話者が「ママ友」を H 平板で発音し、かつ、その語頭に V 字型が観察されたことを意味する。したがって、いずれの大坂式母語話者の発音においても、H 平板では 9 トークン中 9 トークン全てにおいて V 字型のピッチ変化が見られ、L 平板では 7 トークン中 7 トークン全てにおいてそれが見られないことが

一貫して確認できる。

表13：大阪式話者によるH平板とL平板の語頭子音区間のピッチの形状

話者	ママカリ HHHH	渡す HHH	ママ友 LLLH	私 LLH
A	V	V	×	×
B	V	V	×	×
C	V	V	(V)	×
D	V	V	×	×

一方、表14に示した通り、東京式話者の発音には、V字型が現れるかどうかに一貫性は見られなかった。ここでは、大阪のH平板と対照するために、東京式においても語頭のHH連続が許される平板式の語として、第2拍に長音を含む「マージャン」と「マーキング」を東京式母語話者4人(a～d；うち1人は松浦)に発音してもらった。また、比較のために、語頭にLを含む平板式の語として「私LHH」と「渡すLHH」もそれぞれ発音してもらった。表14では、東京式母語話者4人の発音について、語頭の子音区間に大阪式H平板のようなV字型のピッチが観察されたものには「V」と示し、そうでないものは「×」と示している。なお、話者aの「渡す」は録音上の不備によりデータが利用できなかったため、「-」とした。東京式母語話者の発音では、Hが連続する音調型であっても、V字型が現れたのは8トークン中4トークンであり、残りの4トークンは、語頭がLで始まる平板式(LHHとLHHH)と同様に、V字型が観察されなかった。また、V字型の出現傾向についても、例えば話者dのように「マージャン」と「マーキング」の両方においてV字型が現れる話者もいれば、話者aやcのようにいずれか一方だけ現れる話者や話者bのようにいずれも現れない話者もいることがわかる。このことは、東京式で2拍目が長音拍のHHHHやHHHHHの音韻スキーマにおいて、語頭の子音区間におけるピッチの形状が対立をなしていないことを示唆すると思われ、また、それは、東京式がL平板を持たず、2種類の平板式を区別する必要がないことからも当然予測される特徴であると言える。

表 14：東京式話者による平板式の語の語頭子音区間のピッチの形状

話者	マージャン HHHH	マーキング HHHHH	私 LHH	渡す LHH
a	×	V	×	-
b	×	×	×	×
c	V	×	×	×
d	V	V	×	×

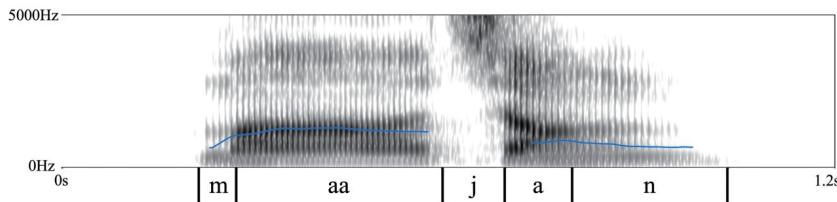


図 12a : a による「マージャン」の発音 (V字型が見られない)

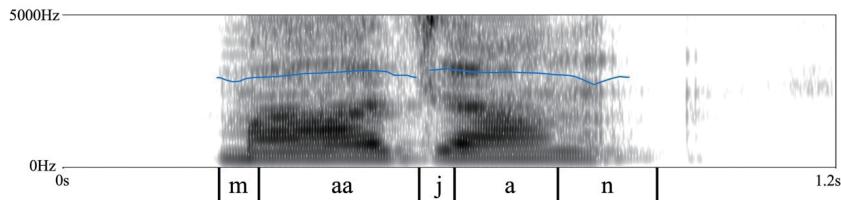


図 12b : d による「マージャン」の発音 (浅いV字型が見られる)

以上のデータを基に考えると、阪大生が大阪式の H 平板と L 平板を区別できない理由の一つは、大阪式と東京式で慣習化されている音韻スキーマの差異に求められる。つまり、大阪式では語頭の子音区間におけるピッチの変化が両平板の区別に貢献する要素として慣習化しているのに対して、そのような音韻スキーマが慣習化していない阪大生（東京式話者）は、H 平板と L 平板を区別するための手がかりを捨象して聞いてしまっている可能性があるということである。

さらに、本節で議論した第 2 の壁は、第 1 の壁に比べて乗り越えるのがはるかに困難であると思われる。なぜなら、語頭の子音区間のピッチ変化という特徴

は、例えば「言社」を HLL と発音するか LHL と発音するかといった違いに比べて、非常に微細なものであるため、そもそもその存在に気づくこと 자체が難しく、習得の意識に上ることすらない可能性があるからである。ただし、本節での考察は、大阪式、東京式とも話者数と調査語のバリエーションなどが量的に不足しているため、ここではあくまで可能性の指摘にとどめておく。

最後に 1 点付け加えておくと、特に大阪式に関して、表 13 のような違いを捉えようとする際、留意しなければならない点がある。それは、大阪式母語話者の中には、図 13 のように、L 平板の語の語頭子音区間にあっても、V 字型のピッチが時折観察される点である（図 13 は田村が発音した「投げる LLH」）。

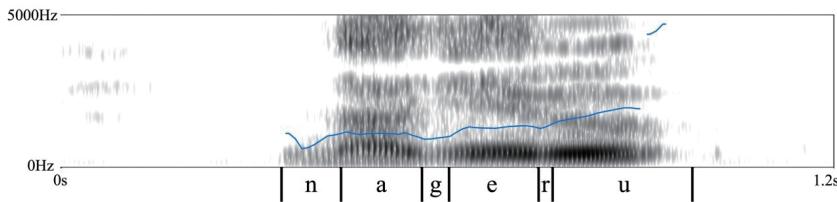


図 13：語頭の子音区間に V 字型が現れる L 平板

このような現象は、ぞんざいな発音などによって、L 平板の L が連続する部分がやや高く始まり、L と H の中間程度の音で平板式が形成される（そのような高さを M と表記するなら MM…H と表記できるような）場合に生じる傾向が見られた。この点についても今後詳しく検討したい。

6. おわりに

本稿では、阪大生と大阪式母語話者の間で生じる認識のギャップの問題をめぐって、以下の議論を行った。まず、Kubozono (2018) の主張と同様、阪大生はアクセント核の有無については習得が進んでいるものの、具体的な音調型の習得についてはあまり進んでいない。そして、そのような習得の途上性が認識のギャップを作り出している。阪大生による大阪式の音調型習得が進まないのは、東京式と大阪式の音韻スキーマの違いに起因する 2 つの壁が存在するためであ

る。第1の壁とは、東京式で認められない音調型を聞いた際に、東京式の音韻スキーマを基に過剰修正を行ってしまい、インド型の語とH平板／L平板の語がそれぞれ持つ具体的な音調に関する情報が捨象されてしまうことである。第2の壁について、大阪式のH平板とL平板は、語頭子音における微細なピッチ変動によって区別されている可能性があり、阪大生がこの2種類の平板式を区別できない理由は、東京式でそのようなピッチの動きが慣習化していないからであると思われる。また、第2の壁はその微細さゆえに第1の壁よりも乗り越え難い可能性が高い。

参考文献

- Bybee, Joan (2012) "Patterns of lexical diffusion and articulatory motivation for sound change," *The initiation of Sound Change: Perception, Production and Social factors*, edited by M. J. Solé and D. Recasens, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 211–234.
- Hyman, Larry M. (2013) "Enlarging the Scope of Phonologization," *Origins of Sound Change: Approaches to Phonologization*, edited by Alan C. L. Yu, Oxford: Oxford University Press, 3–28.
- Kubozono, Haruo (2012) "Varieties of pitch accent systems in Japanese," *Lingua* Volume 122, Issue 13, 1395–1414.
- Kubozono, Haruo (2018) "Bilingualism and Accent Changes in Kagoshima Japanese," *Tonal Change and Neutralization*, edited by Haruo Kubozono and Mikio Giriko, Berlin, De Gruyter Mouton, 279–329.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford: Oxford University Press.
- McCawley, James D. (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*, The Hague: Mouton.
- Ohala, John (1993) "The phonetics of sound change," *Historical Linguistics: Problems and Perspectives*, edited by Charles Jones, London and New York: Routledge, 237–278.
- Shibatani, Masayoshi (1990) *The Languages of Japan*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 上野善道 (1977) 「日本語のアクセント」『岩波講座日本語5 音韻』: 281–321, 岩波書店.
- 上野善道 (2018) 「アクセントの体系と仕組み」北原保雄監, 上野善道編『新装版 朝倉日本語講座3 音声・音韻』: 61–84, 朝倉書店.
- NHK放送文化研究所 (2016) 『NHK日本語発音アクセント新辞典』, NHK出版.

- 儀利古幹雄 (2016) 「日本語のアクセントとその規則性」 チュラーロンコーン大学・大阪大学『日本研究論集』第13号: 6–20.
- 窟菌晴夫 (1998) 「モーラと音節の普遍性」『音声研究』第2巻第1号: 5–15.
- 窟菌晴夫 (2021) 『一般言語学から見た日本語のプロソディー—鹿児島方言を中心に—』, くろしお出版.
- 郡史郎 (2012a) 「京阪式アクセントの特性と動向」『音声研究』第16巻3号: 28–33.
- 郡史郎 (2012b) 「現代大阪市方言における低起式アクセントの特徴」『音声研究』第16巻3号: 59–78.
- 郡史郎 (2020) 『日本語のイントネーション—しくみと音読・朗読への応用』, 大修館書店.
- 杉藤美代子 (1986) 「大阪方言の特殊拍にアクセントを置く単語のアクセント変化」『音声学会会報』第181号: 9–12.
- 田村幸誠 (2023) 「Profile からみた Phonologization: 認知言語学的視点からの音韻記述に関する「橋渡し」的考察」大阪大学英米学会編『大阪大学英米研究』第47号: 39–58.
- 田村幸誠・松浦幸祐 (2022) 「方言習得に関する一考察: 非関西圏出身大学生の京阪式アクセント習得をめぐる調査結果を基に」『時空と認知の言語学 XI』: 29–38.
- 中井幸比古 (2002) 『京阪系アクセント辞典』, 勉誠出版.
- 早田輝洋 (1999) 『音調のタイプロジー』, 大修館書店.
- 松浦幸祐・田村幸誠 (2022) 「音声学基盤音韻論からみた方言習得: 阪大生による大阪アクセント習得における2つの壁」研究会発表 (国立国語研究所: 多言語・多文化社会における言語問題に関する研究), (2022年11月27日発表), <https://researchmap.jp/kosukematsuura/presentations/40586182>.

<付録> 調査語彙のリスト

語	読み	拍数	大阪式	調査対象者への注釈 (スライドに表示)
坂下	さかした	4	LLLH	阪大坂を下りたところ
みのばん	みのばん	4	LHLL LLLH	箕面キャンパスで受ける一般教養科目
パンキョー	ばんきょー	4	LHLL	一般教養科目
バ先	ばさき	3	LLH	「バイト先」の略
言社	げんしや	3	LHL	言語文化研究科「言語社会専攻」の略
再履	さいり	3	LHL	「再履修」の略
豊中	とよなか	4	HHHH	
阪神	はんしん	4	HLLL	阪神タイガース
卒論	そつろん	4	LHLL	
関電	かんでん	4	LHLL	「関西電力」の略
足切り	あしきり	4	LLHL	基準以下の点数を切り捨てる

梅田	うめだ	3	HHH	
難波	なんば	3	HLL	
とりき	とりき	3	LHL	居酒屋「鳥貴族」の略
ニワトリ	にわとり	4	HHHH	
魂	たましい	4	HLLL	
雷	かみなり	4	HHHL LLHL	
阪大	はんだい	4	LLLH	
鈴虫	すずむし	4	LHLL	
地下鉄	ちかてつ	4	LHLL	
カマキリ	かまきり	4	LLHL	
タバコ	たばこ	3	HHH	
男	おとこ	3	HHL HLL	
座学	ざがく	3	HLL	
蛍	ほたる	3	LHL HLL	
イチゴ	いちご	3	LHL	

注

- 1) 「錯覚 LHHH」のように、1拍目が低く2拍目が促音の場合は、LLが連続するように（つまり LLHHのように）聞こえるとされる（郡 2020: 9–10, NHK 放送文化研究所 2016: [12]–[13]）。
- 2) 東京式アクセントにおいても拍がアクセント核を担うとする議論もある。上野（2018）を参照されたい。
- 3) ただし、東京式においても、アクセント核の位置を決める際には、「語末から数えて3拍目」というように、拍を単位に数えている。Kubozono (2012: 1404) や窪塙（1998: 12）では、東京式は「(語末からの) 距離を数える単位 (unit of counting)」は拍であるが、アクセントを担う単位は音節であると整理している。大阪式はアクセントを数える単位もアクセントを担う単位も拍であり、この後でみる鹿児島式はそのいずれもが音節であるとまとめられる（Kubozono 2012: 1404）。
- 4) 「伊東市 LHHL」「お坊さんたち LHHHLL」などの例外については上野（2018: 77）を参照されたい。
- 5) 杉藤（1986: 9）や郡（2012a: 29–30）によれば、大阪式においても若年層においては特殊拍にアクセント核をおく発音が失われつつあるという。

- 6) 中井 (2002: 10–11) で述べられているように、大阪式においても促音は前の拍と合わせた音節が核を担う。中井によれば、例えば「切手」などのアクセントにおいて HLL と HHL の区別がないとされる。ただし、「駆逐艦 クチッカン LLHLL」のように、例外的に促音拍がアクセント核を持つ語が存在することも指摘されている (中井 2002: 11, 上野 2018: 注 10 など)
- 7) 注 3 で示した通り、鹿児島式では音節がアクセントを数える単位として機能するため、「青信号 アオシンゴウ」が 4 音節として数えられている点に注意されたい。
- 8) 田村・松浦 (2022) の 30 語から、フレーズに相当する「あかん」「あかんで」「かまへん」と 2 拍目に促音を含む「摂津」を除いた。したがって、表 2 と表 3 の正解率が前稿とはごくわずかに異なる場合がある。
- 9) 調査語における東京式アクセントは、NHK 放送文化研究所 (2016) を基本に、首都圏出身・在住の東京式母語話者 2 名 (当時ともに 21 歳) と松浦の内省を基にしたものである。また、「みのばん」など、辞書に掲載のない調査語については、同一の東京式母語話者 2 名に松浦が意味等を説明し、東京式での発音を予想して発音してもらったものである。
- 10) 調査語における大阪式アクセントは、田村・松浦 (2022) と同じく、大阪式母語話者である大阪大学の学部生 4 名の発音をもとにしたものである。したがって、伝統的な大阪式の発音とは必ずしも一致しない場合がある。
- 11) 大阪式の正解が 2 通り設定されている語については、いずれかの音調型と一致していれば「音調を正解した」とみなした。また、核有無正解率の計算にあたっては、「みのばん」は起伏型を正解として計算している (以上は田村・松浦 2022 と同じ条件である)。
- 12) 田村・松浦 (2022) では、この差を生み出す最大の要因として、首都圏出身者には起伏式の語を平板式で発音する傾向があるためであると論じた。
- 13) この 2 語は、大阪式ではいずれも語中にアクセント核があるが、阪大生の回答のうち、そのような回答は、「雷」が 14/15、「男」が 10/15 であった。
- 14) 注 11 のように起伏型として扱うならば、核有無正解数は 11/15 であった。
- 15) 阪大生によるそれぞれの回答は次の通り。みのばん : LHLL (11), LHHH (4); 蛍 : HLL (13), LHL (2); 男 : HLL (5), LHL (5), LHH (4), HHH (1); 雷 : LHHL (11), LHLL (2), LHHH (1) HHLL (1)
- 16) Bybee (2012) などでも議論されているように、Ohala の一連の音声学を基盤とする音韻論の研究は、使用依拠モデルを用いた認知音韻研究の基礎理論の役割を果たしている。本稿における以下の Ohala (1993) に基づく方言習得の説明は、大きく、使用依拠モデル (認知音韻論) を前提とした議論であると考えていただきたい (Langacker 2008; 田村 2023)
- 17) Kubozono (2018) の指摘に基づけば、アクセント核については過剰修正されていないこ

とが推測できる。

- 18) 意味の分析に用いられることが多い認知文法の概念（特に、プロファイル, profile, Langacker 2008）を「音」の記述・分析に援用した際の具体的な議論については田村（2023）を参照されたい。

Phonetically-Based Phonology and Dialect Acquisition: Two Barriers for Osaka Japanese Learners

MATSUURA Kosuke, TAMURA Yuki-Shige

With the framework of phonetically-based/usage-based phonology (Ohala 1993; Hyman 2013; Bybee 2012 and Tamura 2023), this paper addresses the accent acquisition of Osaka dialect by college students who come from non-Osaka (non-Kansai more precisely) regions. We, in particular, attempt to clarify the linguistic factors with regard to the issue of why and how the following perceptual gap on dialect learning has ever been produced between the local and non-local students: the newcomer students tend to think of themselves as an "adequate" speaker of Osaka dialect with a couple of years in Osaka, whereas the local students can hardly judge the newcomers' Osaka Japanese as satisfactory nor fluent. With the examination of the data collected from 15 Osaka University students from non-Kansai regions, we suggest that the newcomer students should face at least two major linguistic barriers in the process of learning the new dialect: one concerns whether the realization of the accent kernel in words on Osaka dialect is the same as or is different from that of their own dialect, and the other how the first two morae of the Osaka words are tuned with two different flat melodies, the characteristic of which is absent in their mother dialects. The newcomer students can accommodate themselves to the first barrier relatively well, showing around 80 percent accuracy. However, they show difficulty in attuning themselves to the second barrier, showing around less than 40 percent accuracy. Thus, the newcomer students and the local students employ the different standards to measure the newcomers' fluency of the new dialect.

In section 2, we first outline the major characteristics of Osaka accent compared to those of Tokyo/standard accent, following Shibatani (1990) and Kubozono (2021), and then in section 3, we present the result of our interview research for the newcomer students, pointing out the problems to be accounted in later sections. After showing the essence of John Ohala's phonetically-based

phonology in section 4, we provide an account for the relationship between the perceptual gap and the two potential barriers for the Osaka dialect acquisition in section 5.